

子どもの社会性とメディア接触との関連

菅原ますみ・向田久美子・酒井 厚・坂元 章・一色伸夫

1. はじめに

本プロジェクトの第3回調査では、子どもの社会性とメディア接触との関連について検討を行った。社会性を「仲間との関係において適応的な対人行動がとれる能力」と定義し、社会性を測定する既存の尺度を参考に、「お友達と協力して仲良く遊ぶ」などの15項目を用意した。因子分析の結果、そのうちの7項目を仲間への「協調性・共感性」を測定する尺度として採用した（表1参照）。3歳児の「協調性・共感性」には、性差や月齢差のほか、生活環境による違いも見られた。すなわち、男児よりも女児、月齢の低い子どもよりも高い子ども、また、保育施設の経験があり、母親の養育態度が暖かく、抑うつ傾向が低い子どもほど、「協調性・共感性」が高くなっていた。メディア接触との関連を見たところ、全般的に弱い負の相関が見られたものの、上記の変数を考慮すると有意な相関は見られなくなった。以上のように、3歳児の「協調性・共感性」には、メディア接触よりも、仲間との接触の有無や母親の養育態度が関連していることが示された。

第4回調査では、以下の2点を課題として調査を実施した。1点目は、社会性の概念の拡張である。2歳児に比べると、3歳児は言語や運動能力が発達し、保育施設利用が増えるなど、仲間とのやりとりが質・量ともに充実してくる。そこで、これまでの「協調性・共感性」に加え、仲間への能動的なかわりや適切な対人スキルを測定する「コミュニケーション・スキル」についても検討することにした。下記の尺度を参考にしながら、最終的に表1に見られる7項目を選定した。2点目は、縦断調査により社会性の発達への影響要因を特定することである。それゆえ、第3回調査で用いた「協調性・共感性」の7項目も再び用いることにした。

- A. 乳幼児精神発達質問紙（3～7歳）（津守・磯部，1965）の「社会」「言語」
- B. 新版S-M社会生活能力検査（1980）の「意志交換」「集団参加」
- C. 社会的スキルアセスメント（畠山・畠山・山崎，2003）
- D. 自己制御機能（柏木，1988）の「自己主張」「自己抑制」
- E. 発達期待（東・柏木・ヘス，1981）の「言語的自己主張」「情緒的成熟」「社会的スキル」
- F. 幼児用社会性尺度（沢宮，1998）
- G. 幼児版教師評定社会的スキル尺度（磯部・佐藤，2003）
- H. 社会的スキル尺度（庄司，1991）
- I. SCBE尺度（LaFreniere & Dumas，1996，Psychological Assessment）の「社交性」と「不安」
- J. ASBI尺度（Hogan, Scott, & Bauer, 1992, Journal of Psychological Assessment）の“Express,” “Comply,” “Disrupt”

2. 方法

調査時期：平成18年 3月

調査対象：本調査の参加者は、平成14年 2月～7月に川崎市で生まれた乳児（調査時 3歳）1250家庭のうち、回答のあった938家庭の母親と父親である。

3. 結果

(1) 平均値とSD

表1に社会性に関する各項目の平均値と標準偏差を示す。性差について検討したところ、項目1, 2, 3, 4, 6, 7, 10, 12, 14で有意差が見られ、いずれも女兒のほうが高くなっていた（順に、 $t=-2.57, p<.05$ ； $t=-2.88, p<.01$ ； $t=-1.98, p<.05$ ； $t=-3.14, p<.01$ ； $t=-3.63, p<.01$ ； $t=-2.11, p<.05$ ； $t=-2.80, p<.01$ ； $t=-2.67, p<.01$ ； $t=-4.34, p<.01$ ）。保育施設の利用との関連では、全14項目において、利用している群のほうがしていない群よりも高くなっていた（順に、 $t=4.13, p<.01$ ； $t=8.32, p<.01$ ； $t=4.43, p<.01$ ； $t=4.61, p<.01$ ； $t=4.50, p<.01$ ； $t=4.76, p<.01$ ； $t=5.33, p<.01$ ； $t=2.58, p<.05$ ； $t=6.75, p<.01$ ； $t=3.06, p<.01$ ； $t=2.78, p<.01$ ； $t=2.32, p<.01$ ； $t=3.65, p<.01$ ； $t=5.31, p<.01$ ）。

表1 社会性に関する項目の平均値とSD

| | | | 平均値 | SD |
|---|----|----------------------------------|------|------|
| 協 調 性 ・ 共 感 性 | 1 | 遊びの中で自分の順番を待てる | 4.03 | 0.89 |
| | 2 | グループで活動するとき、他の子どもと協力できる | 3.86 | 0.87 |
| | 3 | お友だちが困っていること（気持ち）がわかる | 3.88 | 0.80 |
| | 4 | お友だちと意見が合わないとき、うまく解決策を見つけられる | 3.03 | 0.94 |
| | 5 | 自分のおもちゃをお友だちにも貸してあげて、一緒に遊べる | 3.93 | 0.87 |
| | 6 | お友だちが困っているときに、なぐさめたり助けたりする | 3.86 | 0.88 |
| | 7 | お友だちと協力して、仲良く遊ぶ | 4.00 | 0.78 |
| コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン ・ ス キ ル | 8 | 自分からお友だちを遊びに誘う | 3.81 | 1.10 |
| | 9 | 遊び仲間に入るとき、自分から「入れて」と言う | 3.68 | 1.13 |
| | 10 | お友だちの話を終わりまで聞く | 3.27 | 0.96 |
| | 11 | お友だちと意見が違って、自分の意見をはっきり言うことができる | 3.56 | 1.05 |
| | 12 | 自分の意見が通らないとき、妥協することができる | 3.00 | 0.98 |
| | 13 | お友だちに「ありがとう」「ごめんね」などの言葉がきちんとと言える | 4.10 | 0.88 |
| | 14 | 遊びやゲームのルールが守れる | 3.61 | 0.90 |

(2) 社会性項目の因子分析

社会性を測定する14項目に対し、主成分分析を行ったところ、固有値が1以上となったのは第2主成分までであり、その減衰は5.84、1.70となっていた。そこで因子数を2に指定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、表2のような結果となった。第一因子に高く（.50以上）負荷していたのは、「遊びやゲームのルールが守れる」をはじめとする9項目（1, 2, 3, 4, 5, 7, 10, 12, 14）であった。これらの項目のうち、10, 12, 14は今回新たに加

えた項目であるが、いずれも仲間関係における協調性・共感性を表していると考えられることから、第一因子を「協調性・共感性」と名づけた。この9項目の a 係数は、 $a=.87$ であった。一方、第二因子に高く負荷していたのは、「遊び仲間に入るとき、自分から『入れて』と言う」「お友だちと意見が違って、自分の意見をはっきり言うことができる」などの3項目（8, 9, 11）であったことから、「能動性・自己主張性」と命名した。この3項目の a 係数は、 $a=.78$ であり、第一因子とともに内的整合性が高いことが示された。第一因子と第二因子の相関は $r=.58$ ($p<.01$) であった。

表2 社会性の因子構造

| 項目 | 第一因子 | 第二因子 |
|------------------------------------|-------|-------|
| 14 遊びやゲームのルールが守れる | 0.72 | -0.10 |
| 1 遊びの中で自分の順番を待てる | 0.71 | -0.15 |
| 5 自分のおもちゃをお友だちにも貸してあげて、一緒に遊べる | 0.70 | -0.02 |
| 12 意見が通らないとき、妥協できる | 0.70 | -0.18 |
| 4 お友だちと意見が合わないとき、うまく解決策を見つけられる | 0.69 | 0.02 |
| 2 グループで活動するとき、他の子どもと協力できる | 0.66 | 0.18 |
| 7 お友だちと協力して、仲良く遊ぶ | 0.57 | 0.27 |
| 10 お友だちの話を終わりまで聞く | 0.55 | 0.04 |
| 3 お友だちが困っていること（気持ち）がわかる | 0.52 | 0.13 |
| 6 お友だちが困っているときに、なぐさめたり助けたりする | 0.43 | 0.33 |
| 9 遊び仲間に入るとき、自分から「入れて」と言う | -0.11 | 0.86 |
| 8 自分からお友だちを遊びに誘う | -0.15 | 0.85 |
| 11 お友だちと意見が違って、自分の意見をはっきり言うことができる | -0.03 | 0.64 |
| 13 お友だちに「ありがとう」「ごめんね」などの言葉がきちんと言える | 0.26 | 0.43 |

(3) 3歳時点での子どもの社会性とテレビ視聴との関連

3歳時点で抽出された社会性の2つの因子とテレビ視聴との関連について検討をおこなうために、「協調性・共感性」と「能動性・自己主張性」それぞれの加算得点を従属変数とする階層重回帰分析をおこなった。表7に示したように、説明変数として解析に投入したのは、3ブロック10変数である。第1ブロックでの説明変数群は月齢、性別、出生順位の3つの属性変数、第2ブロックは「協調性・共感性」および「能動性・自己主張性」と有意な相関（表5,6参照）を示している保育所通所経験の有無と一緒に遊ぶ仲の良い友だちの人数、第3ブロックにテレビ接触量と父親および母親のフィルタリング変数（共有と統制）を説明変数として投入し検討をおこなった。

両親の子どものテレビ視聴に対するフィルタリング変数の構造分析…父親、母親それぞれに対して子どものテレビ視聴に関する表3の5項目を尋ねた。回答は、5. あてはまる～1. あてはまらないの5段階である。父親、母親それぞれについて因子分析（主因子法バリマックス回転）をおこなったところ、想定した親の2つのフィルタリング機能（“統制機能”と“共有機能”）に関連する固有値1.0以上の2因子が抽出された（表3）。

表3 子どものテレビ視聴に対する親のフィルタリング機能に関する因子分析
(主因子法バリマックス回転、数字は因子負荷量)

| 項目 | 統制機能 | | 共有機能 | |
|--------------------|-------|-------|-------|-------|
| | 父親 | 母親 | 父親 | 母親 |
| 見てよい番組が決まっている | .80 | .82 | | |
| 見てはいけない番組が決まっている | .87 | .78 | | |
| 見せたくない内容はチャンネルを変える | .61 | .63 | | |
| 子どもと一緒に見る | | | .77 | .73 |
| 見ている内容について子どもと話す | | | .76 | .72 |
| 寄与率(%) | 35.82 | 33.81 | 24.34 | 21.25 |

両親のフィルタリング機能間の関連性…表3で得られたフィルタリング機能に関する2つの因子を構成している項目を加算した得点を父母それぞれについて求め、両親間の相関を算出した(表4)。共有機能、統制機能ともに両親間で有意な関連が認められたもののいずれも弱めの値を示しており、両親間で一致していない世帯も少なからず存在している傾向が伺われた。

表4 フィルタリング機能に関する両親間の一致度(相関係数, N=932)

| | 母親の統制機能 | 母親の共有機能 |
|---------|---------|---------|
| 父親の統制機能 | .36** | -.00 |
| 父親の共有機能 | -.03 | .21** |

** : p < .01

保育施設利用の有無および子どもの友だち関係…社会性の発達には同世代の子どもたちとの接触経験が促進要因として働くことが想定されるが、今回の調査ではこれに関連する変数として、保育施設の利用の有無と子どもの友だち関係に関する項目(一緒に遊ぶ仲の良い友だちの人数と遊ぶ頻度)を設定し回答を求めた。保育施設を利用している群の方が「協調性・共感性」「能動性・自己主張性」ともに有意に得点が高く(表5)、また1週間に友だちと遊ぶ頻度(1. お友だちと遊ぶ日はほとんどない~5. ほとんど毎日お友だちと遊んでいる、までの5段階評定)や仲の良い友だちの数(1. 決まったお友だちはいない~7. 10人以上、の7段階評定)の多さと社会性得点との間にも有意な関連がみられた(表6)。なお、保育施設の利用をしていると友だちと遊ぶ頻度が必然的に多くなると考えられるが、両者には中程度の相関($r=.47, p < .01$)がみられたので、表7の階層重回帰分析には友だちの人数に関する変数を投入することにした。

表5 保育施設の利用の有無と社会性得点との関連 (平均値の差のt-検定)

| | 利用あり群 (399名) | | 利用なし群 (526名) | t-値 |
|-----------|--------------|---|--------------|--------|
| 協調性・共感性 | 27.78 (4.21) | > | 25.75 (4.45) | 7.11** |
| 能動性・自己主張性 | 11.55 (2.55) | > | 10.67 (2.82) | 4.95** |

()内はSD, **: p < .01

表6 友だち関係と社会性得点との関連 (相関係数、N=938)

| | 協調性・共感性 | 能動性・自己主張性 |
|-----------------|---------|-----------|
| 1週間に友だちと遊ぶ回数 | .27** | .27** |
| 一緒に遊ぶ仲の良い友だちの人数 | .26** | .34** |

** : p < .01

2つの社会性得点(「協調性・共感性」・「能動性・自己主張性」)を従属変数とした階層重回帰分析の結果…表7に上記の諸変数を投入した階層重回帰分析の結果を示した。第1ステップとして子どもの性別、年齢(月齢)、出生順位、第2ステップでは子どもの友だちの人数と保育施設利用の有無の2つの家庭外変数、第3ステップにテレビ接触量と両親のフィルタリング変数を投入した。協調性・共感性では男児より女児の方が、また出生順位が下の方が社会性得点が高い傾向にあることがされた。第2ブロックでは保育施設利用と友だちの数の2変数とも有意な関連があり、施設利用をしていることと友だちの人数が多いことがより高い社会性得点と関連している。第3ステップのテレビ関連変数では、テレビ接触量は有意な関連が認められなかったが、母親のテレビ共有機能は協調性・共感性および能動性・自己主張性両方の得点と弱いながらも有意な関連が見られ、また統制機能の高さも協調性・共感性と関連がみられた。テレビをどのように子どもに見せるかという親の態度や行動が幼児期の社会性の発達に関わりを持つことを示唆する結果といえよう。親子が共有している番組の内容の分析を含めて、親のテレビ視聴に関するフィルタリング機能がどのようなメカニズムによって子どもの社会性の発達に関わるのかを明らかにすることが今後の課題である。

表7 社会性得点を従属変数とする階層重回帰分析 (N=938)

| 説明変数 | 協調性・共感性 | | 能動性・自己主張性 | |
|------------------------------|---------|------------|-----------|------------|
| | β | 調整済み R^2 | β | 調整済み R^2 |
| 第1ステップ | | .02** | | .00 |
| (子どもの属性) 子どもの性別 | .11** | | .01 | |
| 子どもの年齢 | .03 | | .00 | |
| 子どもの出生順位 | .09* | | .05 | |
| 第2ステップ | | .11** | | .13** |
| (家庭外変数) 子どもの友だちの数・遊ぶ回数：友だちの数 | .20** | | .32** | |
| 保育施設の利用有無 | -.19** | | -.09* | |
| 第3ステップ | | .14** | | .13** |
| (テレビ関連変数) テレビ接触量 | -.05 | | -.04 | |
| テレビ視聴の共有 (父親) | -.03 | | .02 | |
| テレビ視聴の統制 (父親) | .05 | | .02 | |
| テレビ視聴の共有 (母親) | .13** | | .07* | |
| テレビ視聴の統制 (母親) | .09* | | .04 | |

引用文献

- 東・柏木・ヘス (1981) 母親の態度行動と子どもの知的発達—日米比較研究 東京大学出版会
- 畠山美穂・畠山寛・山崎晃 (2003) 仲間とうまく関われない幼児はどのように社会的スキルを学習するか—日常の保育場面での遊びや保育者との関わりを通して— 保育学研究, 41, 20-28.
- Hogan, A. E., Scott, K. G., & Bauer, C. R. (1992) The adaptive social behavior inventory (ASBI): A new assessment of social competence in high-risk three-year olds. Journal of Psychoeducational Assessment, 10, 230-239.
- 磯部美良・佐藤正二 (2003) 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, 51, 13-21.
- 柏木恵子 (1988) 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- LaFreniere, P. J. & Dumas, J. E. (1996) Social competence and behavior evaluation in children ages 3 to 6 years :The short form (SCBE-30). Psychological Assessment, 8, 369-377.
- 西野泰広 (1990) 幼児の自己制御機能と母親のしつけタイプ 発達心理学研究, 1, 49-58.
- 水野里恵・本城秀次 (1998) 幼児の自己制御機能：乳児期と幼児期の気質との関連 発達心理学研究, 9, 131-141.
- 沢宮容子 (1998) 幼児用社会性尺度の作成 応用心理学研究, 24, 9-17.
- 庄司一子 (1991) 社会的スキル尺度の検討—信頼性・妥当性について 教育相談研究, 29, 18-25.
- 津守真・磯部景子 (1965) 乳幼児精神発達診断法 3才～7才まで 大日本図書